

特集 患者の高齢化と透析療法



編集責任

つくば国際大学 医療保健学部 医療技術学科

篠田俊雄 SHINODA, Toshio

わが国の高齢化は著しく、2018年10月1日現在、65歳以上の人口は3558万人で、その総人口に占める割合（高齢化率）は28.1%である¹⁾。さらに出生率も低いため、2050年には老年従属人口指数（15歳から64歳の生産年齢人口100人が、0歳から14歳の若年者と65歳以上の高齢者を何人支えているかを示す比率）が世界一になるという予測がある。高齢者では認知症やフレイルなどの合併が多くなる一方、心身ともに元気な高齢者も多く、2017年の（一社）日本老年医学会による提言²⁾のように、現在の後期高齢者に当たる75歳以上を高齢者と呼ぶほうが実感に近いという考え方もできる。

透析患者においても、2018年末現在の（一社）日本透析医学会による調査³⁾で全患者339,841名のうち、65歳～74歳が約33%、75歳以上が約35%と、高齢者が全体の70%近くを占めるという状況である。このため、高齢化の問題点を有する患者が比率として一般人口の2倍以上存在する可能性だけでなく、透析患者特有の病態が加わっているため問題は一層深刻である。他方、一般人口と同様に心身ともに元気な患者も少数ながら存在するので、高齢透析患者の治療を一律に行うわけにもいかない。また、血液透析患者は週3回の通院を要するため通院の支援を要する患者も多く、高齢に伴う栄養障害がある患者も多い。

このような背景から、今回の特集では高齢透析患者の医学的問題点、透析困難症に有用

なオンライン血液透析濾過法、高齢患者における在宅血液透析の問題点、高齢患者に対する腹膜透析の活用、高齢患者の血液透析療法における安全対策、高齢透析患者の栄養管理、高齢者の透析の開始と継続に関する意思決定プロセス、高齢透析患者に対する社会的支援をとり上げ、それぞれのエキスパートにわかりやすく解説していただいた。

高齢透析患者の治療を考えるうえで、これらの論文が読者のお役に立つことを希望する。

なお、（一社）日本透析医学会による統計調査結果の最新版（2019年末現在）⁴⁾が2020年の年末に公表されたが、本特集は公表前に執筆いただいたため、2018年末現在の統計調査結果³⁾を引用している。最新の数値を引用していない結果となっているが、論文の趣旨に大きく影響することはないため、引用文献の差し替えを行わなかったことをお許しいただきたい。

■文献

- 1) 内閣府：令和元年版高齢社会白書
<https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/index-w.html> (2021年1月26日現在)
- 2) 日本老年学会、日本老年医学会：「高齢者に関する定義検討ワーキンググループ」報告書、2017年3月31日
https://www.jpn-geriat-soc.or.jp/info/topics/pdf/20170410_01_01.pdf (2021年1月26日現在)
- 3) 新田孝作、政金生人、花房規男ほか：わが国の慢性透析療法の現況（2018年12月31日現在）、日本透析医学会雑誌 52(12): 679-754, 2019
- 4) 新田孝作、政金生人、花房規男ほか：わが国の慢性透析療法の現況（2019年12月31日現在）、日本透析医学会雑誌 53(12): 579-632, 2020